



日本郵便株式会社 本社 郵便・物流事業統括部
切手・葉書室 切手デザイン担当

山田 泰子さんに聞く

[聞き手] 川島 葵さん フリーアナウンサー

人々が思いを込めた手紙に 彩りを添える 切手デザイナーという仕事

C L O S E U P

やまだ・やすこ

奈良県出身。高校卒業後、京都精華大学芸術学部デザイン学科ビジュアルコミュニケーションデザイン専攻に進学。2003年に卒業後、中学校の美術教師を務める。退職後、年賀状の仕分けのアルバイトをきっかけに京都府の郵便局に入社し、集配業務に携わる。2014年、社内公募で切手デザイナーに採用され、日本で7人(取材時)のみの切手デザイナーとして活動。数多くの切手デザインを手掛ける。

絵を描くのが大好きだった子ども時代

川島 本日は東京・大手町にある日本郵便株式会社の本社に来ています。お話を伺うのは、日本に7人（取材時）しかいない切手デザイナーの一人である山田泰子さんです。切手ファンの一人として、今日の取材をとっても楽しみにしていました。早速ですが、幼少期の山田さんはどんなお子さんだったのでしょうか。

山田 記憶はないのですが、1歳半ごろから襖に絵を描いていたそうです。幼稚園の時は塗り絵で遊んだり、母が趣味で集めていた画集を眺めたり、絵が好きなお子もでした。人を笑わせたり、驚かせたりするのが好きで、親戚の前で一発芸を見せたりしていましたね。

川島 子どもの頃はどんな絵を描いていたのですか。

山田 人を描くことが多かったですね。画集に出てくる人を真似て描いたり、描いた絵を切り抜いて着せ替えを作ったりしていました。ある時、母が、家に遊びに来た親戚に私が作った着せ替え人形を見せていたのを覚えています。

川島 本当に絵を描くのが好きだったんですね。それから

本格的に芸術の道に進むようになったきっかけは何だったのでしょうか。

山田 動物が好きだったこともあり、高校生の頃まで獣医になりたいと思っていましたのですが、受験を目前にした高校3年生の時、本屋で参考書を物色していると「芸術学部」という言葉が目飛び込んできました。それから芸術学部に進学したいという気持ちが強くなりました。美術系の大学を志望している同級生がいたので相談したところ、美大受験用の絵画教室に通った方がよいと教えてくれたのですが、それが高校3年生の夏のことだったので、その年は準備が間に合いませんでした。翌年から予備校に通って本格的に絵の勉強を始めたのですが、その時に京都精華大学に通っていた先輩の話聞いて、私も志望するようになりました。

川島 京都精華大学の芸術学部デザイン学科に進学された理由が、デザイン学科を選んだ理由は何だったのでしょうか。



山田 卒業後は、デザインに関する仕事に携わりたいと思います、デザイン学科を選択しました。

大学の学びで培った

たくさんのか引き出し”

川島 美術大学の入試とはいったいどんな試験があるのでしょうか。

山田 私が受験した時は、いくつかの課題の中に「3つの素材を組み合わせ、3時間でデッサンする」というものがありました。素材の組み合わせ方や見せ方で全く違う作品に仕上がりますので、ただ並べて上手に絵を描くことだけでなく、そういった「自分なりの工夫」も採点基準の一つだったのかもしれませんが。絶対に合格したかったので、当日はお守りをたくさん身につけて受験したんですよ。

川島 実際に進学してみて大学の印象はどうでしたか。

山田 入学式の後、先輩方の歓迎がうれしくて、この大学に入れて本当に良かったと思います。1〜2年次は、いわゆる「一般教養」に加えてデッサンの基本から写真やアニメーションまで幅広い分野について学びましたが、

どの授業も本当に楽しかったですね。周りの学生はみんな「他人より面白い作品を作るぞ」という意気込みを持っていて、とても刺激を受けました。課題を提出するために徹夜で作業をすることもありましたが、楽しくても良い環境だったと思います。

川島 学生時代はどんな作品を作っていたのですか。

山田 パソコンを使ったデザインの方法を学んでからは、自分で描いた絵をパソコンに取り込んで彩色することにはまっていました。例えば、「馬のお面をかぶった人が並んだメリーゴーランド」といったシュールな絵をたくさん描いて、絵本を作ったりしていました。今でもアイデアが浮かんだらノートに描いて残すようにしています。

川島 そのノートもぜひ拝見したいですね。山田さんにとって京都精華大学で過ごした4年間はどんな時期だったのでしょうか。

山田 大学ではいろいろなことが学べましたし、友人も



山田 泰子さん

たくさんできました。本当に楽しくて充実した4年間を過ごせたと思います。短期留学の経験はもちろん、著名な方を招いた講義なども貴重な経験でした。

川島 学生時代に学んだことで、今に生かされていると感じることはありますか。

山田 私は水彩絵の具を使って切手をデザインすることが多いのですが、題材によっては技法を変えて違うテイストを取り入れた方がよい場合もあります。そんな時は、大学での学びを通していろいろな技法の引き出しを作れていたことが本当に役立っています。

年賀状に込められた 人々の想いに感動

川島 就職を見据えて進学されたとのことでしたが、どのように就職活動をされたのでしょうか。

山田 周りの同級生の多くはデザイン会社に就職したのですが、私は教職免許を取得していたこともあり、中学校で美術の非常勤講師として働きながら自分の作品を制作することにしました。



川島 教師のお仕事は楽しかったですか。

山田 教師の仕事は難しいこともありましたが、美術に関われることに幸せを感じていました。しかし、学期末に成績を付ける段階になって、生徒それぞれが頑張った作品に点数を付けることにどうしても抵抗がありました。この経験から、私は教師に向いていないと思い退職することを決めました。

川島 その後、選んだのが郵便局のアルバイトですが、どんなきっかけがあったのでしょうか。

山田 たまたま年賀状の仕分け作業のアルバイトを募集するチラシが郵便受けに入っていて、息抜きのつもりでやってみたんですが、本当に楽しくて。郵便物の仕分けをしていると、宛名面をシールで飾ったり、宛名を筆で丁寧に手書きしていたり、お客さまの情熱が注がれていることに気付き、私はそれにとっても感動しました。その時、「人々のクリエイティブさがあふれる年賀状文化に関わる仕事をしたい」と本気で思ったのです。集配社員（郵便物を取り集めたり配達する社員）として京都の郵便局に入社したのが、2007年のことでした。

川島 具体的にどんなお仕事をされていたのですか。

山田 封書や葉書の配達のほか、バイクでポストを回って郵便物を取り集めたり、ゆうパックなどの荷物を配達したり、集配業務全般を担当していました。

川島 どんなどころにやりがいを感じましたか。

山田 書留などを対面配達した時にいろいろな声を掛けていただいたり、対面配達ではない封書や葉書を郵便受けに入れる時に、庭先に出ていたお客さまから直接「今日もありがとう」と声を掛けていただいたり。それだけでうれしい気持ちになりました。

オリジナルの絵葉書が評判に

川島 毎年、オリジナルの絵葉書を作って馴染みのお客さまに配られていたそうですね。現物を見せていただいたのですが、山田さんがバイクに乗って配達しているイラストがとてもかわいくてすてきでした。これはいつから始められたのですか。

山田 入社して間もない頃からですね。配達先で切手や葉書を販売した時に、多くの方が購入してくださったのがとてもうれしくて、皆さんにお礼状を書きたいと思い、

自分で絵葉書を作って渡しました。それをまた喜んでただけて、どんどん注文してもらえようになりました。最終的には固定のお客さまが300人くらいとなり、年賀葉書も多くの枚数をご購入いただけるようになりました。

川島 山田さんから届く絵葉書を楽しみにしていた人も多いのではないのでしょうか。

山田 初めて購入していただいたお客さまに絵葉書を送ると、親近感を持っていただけなのか、次にお会いした時に距離感の変化を感じました。お手紙の力つてすごいなど改めて思いました。

社内公募に合格 切手デザイナーの道へ

川島 2014年には切手デザイナーの道に進まれますが、経緯について教えてください。

山田 私がデザインを学んでいたことを知っていた上司が、「切手デザイナーの社内公募があるよ」と教えてくれたのです。デザイナーの社内公募は初めての試みで、当時、私は切手をデザインしている部署があったことすら知り

ませんでした。これは挑戦しなかつたら絶対に後悔する」と思い応募しました。

川島 まさに運命的な募集だったかと思いますが、面接試験ではどのような思いを伝えられたのでしょうか。

山田 面接官の方から「そんなに緊張しなくていいから」と言われるくらい緊張してしまいました。あまり詳細は覚えていないのですが、「もし採用されなくても、絵を描いていきます」と後ろ向きなことを言ってしまったのを覚えています。

川島 採用が決まった時はどんな気持ちでしたか。

山田 本当にびっくりしました。夢を見ているんじゃないかと思うくらいうれしかったです。

川島 最初に手掛けたのはどんな作品だったのですよ





作業風景

うか。

山田 2015年10月29日に発行された、2016年用の年賀切手です。2014年の後半から企画が始まったのですが、年賀切手は郷土玩具をモチーフにする慣例があったので、最初は全国の郷土玩具を調べるところから始めました。2016年は申年でしたが、猿は茶色のイメージなのでどうしても地味な印象になってしまいます。そこで、ピンク色の猿の郷土玩具を選び、背景に花をあしらって華やかさを出しました。最終決定するまでに20案くらい出したのですが、かなり苦労しました。

川島 苦労してデザインした切手が全国の方々に使われるわけですが、どんなお気持ちでしたか。

山田 自分がデザインした切手が郵便局で売られるなんて、現実とは思えないくらいうれしくて、夢を見ているようで。親族一同に知らせたらとても喜んでくれました。

全ての切手デザインにドラマがある

川島 切手を作るお仕事はどのようなプロセスで進められるのでしょうか。

山田 特殊切手は年間約30件発行されるのですが、発行の約10カ月前から準備を開始します。「テーマや題材の決定」↓「作画」↓「デザイン決定」↓「印刷会社との契約」↓「印刷」↓「郵便局への納入」↓「発行」といった工程を行わなくてはなりません。各工程、それなりの日数を要しますので、作画に費やせるのは実質2〜3週間です。約30件の切手を7名（取材時）のデザイナーで

分担し、1人当たり年間約4件の切手を担当しますので、複数の切手を同時進行することになります。

川島 作画期間が思っていたよりずっと短いことに驚きました。山田さんが切手をデザインするに当たり、特に心掛けていることや、意識されていることはありますか。

山田 私自身、切手を販売していたことがありますので、使いやすさや彩りにはとても気を配っています。

川島 一切手ファンとしては、送る方に合わせて切手を選ぶのがとても楽しいです。届いた時にこの方は私からのメッセージを受け取ってくれるかな？と考えながら、この方にはこれがぴったりと感じる切手を選ぶのも幸せな時間です。

山田 とてもうれしいです。ありがとうございます。

川島 切手はとても小さな世界にデザインが凝縮されています。それゆえのデザインの難しさや醍醐味があれば教えてください。

山田 私の場合は、まず切手の原寸サイズでラフを描き、切手として完成した場合の見え方のイメージをつかみます。それからA4サイズの大きさを具体的なデザインを起こし、それを改めて切手のサイズに縮小するという手順で作成しています。原寸サイズに縮小した際に絵柄がつぶれてしまわないよう考えながらデザインするところが、難しくもあり工夫のしがいがあるところだと思っています。

川島 これまでに多くの切手のデザインを手掛けられたと思いますが、特に記憶に残っているものはありますか。

山田 どの切手をデザインする時もなかなか一筋縄ではいかず、必ず何かしらドラマがあるものなんです。ですからどれも記憶に残っています。

川島 個人的には、SNSなどでも大きな話題になった「日デนมマーク外交関係樹立150周年」の特殊切手が印象に残っています。イラストがとてもかわいくて、色合いも優しい。ご自身の作風や新たなデザインなども意識

されているのでしょうか。

山田 私は普段から、例えば文具店を巡って人気があるグッズを見るなど、リサーチするようにしています。また、可能な限りデザイン対象の現物を確認するようにも

して、休みの日に現地まで見に行ったりしています。ちなみにデンマークにも行きました。毎回海外に行くわけにはいきませんが（笑）。特殊切手の発売日には、郵便局に購入に来られた郵趣家ゆうしゆかの方や窓口の担当者に意見や感想を聞いて、次回のデザインの参考にするようにしています。いま川島さんからうれしいお話を伺いましたが、お客さまの声を聞くことがとてもありがたいです。

手紙で思いを伝える

心優しい人のために

川島 デザインがかわいくて、思いを乗せて使うことができ、しかも気軽に買える。切手は私にとって本当に

生活に彩りを与えてくれる、使える作品です。その一方で、切手を貼って手紙を出す人や年賀状を出す人が年々減ってきているといわれていますが、山田さんはそうした状況をどう感じていますか。



山田 無料で使えてすぐにメッセージが届けられるメールやアプリが広く普及していますが、それでも手書きで時間をかけて思いを伝えようとする方がいる。そんな方々が、使う時に楽しいと思ってもらえるような切手を作りたいと思っています。切手の制作期間は短いですが、私は毎回、魂を込めてデザインしています。少しでも感動してもらえるような切手を世の中に送り出していきたい。そのためにも、もっと技術を磨き、新しいアイデアを出していきたいと思っています。

川島 これからも、切手ファンの一人として、山田さんがデザインした新しい切手の発行を楽しみにしています。本日はありがとうございました。